南朝太平

# 忠臣往来　全

新田氏畧傳
楠氏畧傳
北畠氏畧傳
名和氏畧傳
児島氏畧傳
菊池氏畧傳

教育
E09
K

10150
教科書文庫
1
101
10-1864
20000
48647

KODAK Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak

教育学科

E09 1 K

# 序

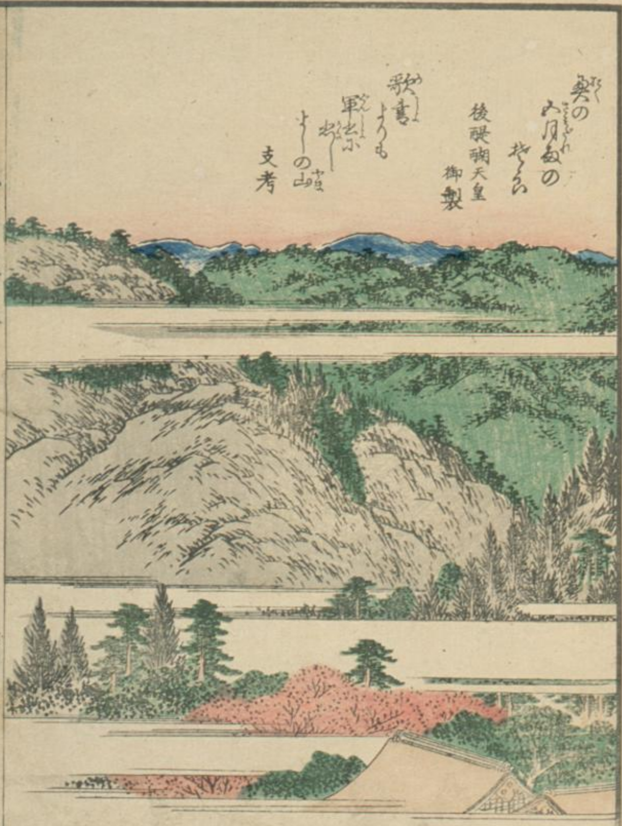
陽唱忠義陰抱奸悪欺罔一時以興其身足利尊氏赤松大友等是也丹心報君以死殉國惟忠義是視不計其他新田楠菊池諸公是也足利等留臭萬年雖傾江河不能洗其悪名也指童子曰汝似新田楠諸公則必欣々然喜之勃然色汝曰類足利赤松等必怫然戦手如来良心之感發而以見矣人生無不之向本好不能辨焉大抵媚己者爲忠拂己者爲奸之爲奸人所棄而終遂大不失大業變亦不可識矣此書爲童蒙感觀之一資然猶農人

商夫無喪其良心寄於危難國之義無貴奸悪之將奮然戴忠滅之主上下一心竭其力同天擇日之業而孫與之新田楠諸公同功一體也所謂流芳百世者其在此矣至在於矣

元治元年甲子季夏識於浪華僑
於橋西搖篠君氣類無之際
長山雲亭主人

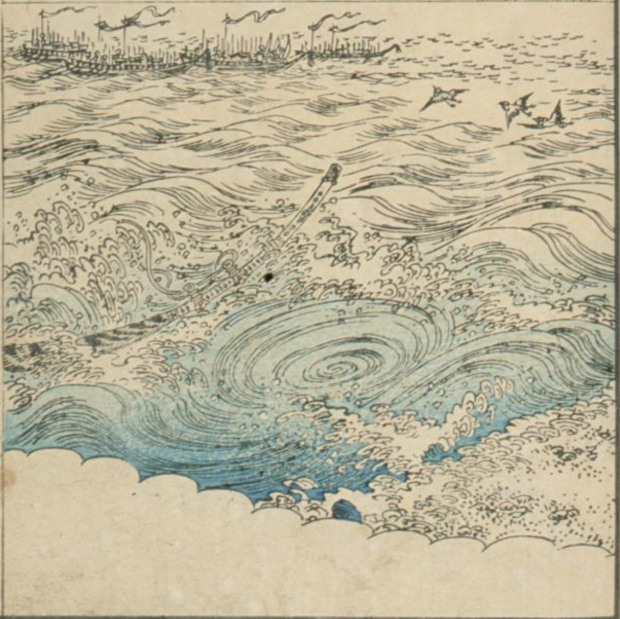
廣島大學圖書之印
廣島大学 48647

芳野山後醍醐帝皇居の圖
都ぞ淋し
かりしと
雲それぬ
吉野の


奥の
み山がくれの
花ならい
後醍醐天皇
御製
歌書よりも
軍書にかなし
よしの山
支考

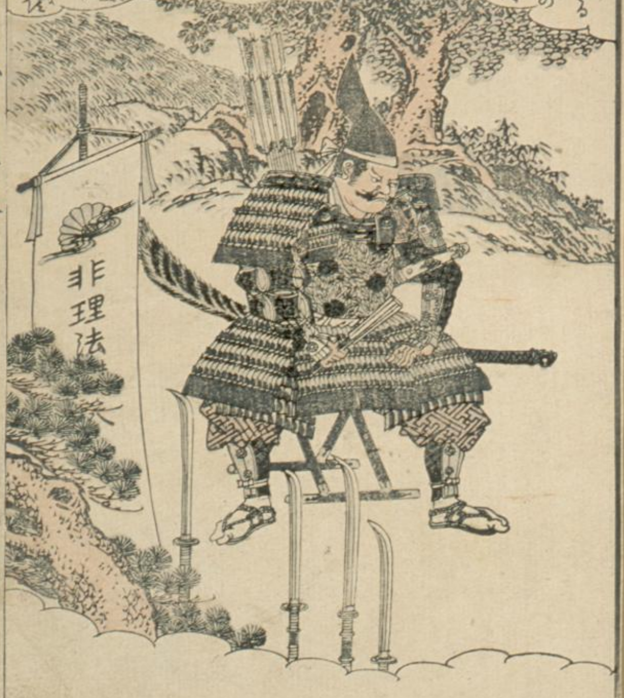
新田左中将源義貞ハ清和天皇七代の後胤源義家十代の末孫し正慶二年四月義貞兵を進めて鎌倉を

攻る時極楽寺切通し稲村崎の路狭くして軍卒すゝみがたく義貞自ら佩へる黄金作りの太刀を海中へ投入龍神に祈誓なしければ稲村崎二十四五丁遠干潟となり宗徒の軍勢六万餘騎馳通つて鎌倉へ打入大に勝利を得る此時鎌倉方にハ名ある勇士ことごとく討死し高時ハ東勝寺におゐて自殺し北条一門爰に滅亡そ



贈正三位左近衛中将楠正成卿ハ左近大夫正玄の長男にして永仁二年甲午歳河内国石川郡金剛山の麓に誕生あり正玄の父を正俊といふ館の四方に楠を多く植られしにより楠殿と称せられし正俊ハ井手左大臣橘諸兄公十三代の孫なり正玄の妻志貴山の毘沙門天に祈りて夢相を

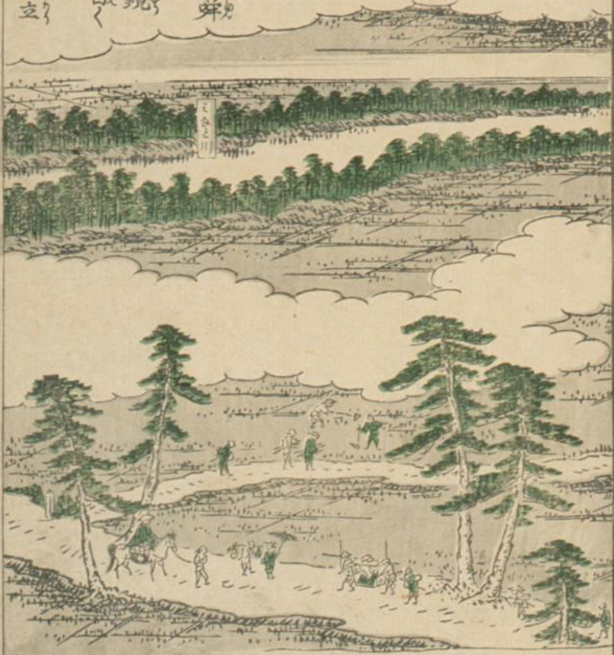
感じて設るゆへ正成卿の幼名を多門丸と号した長ずるに及で文武両度と兼備の張子房が兵法を諳ず後醍醐帝の御味方申さ義兵をあげ数度の軍功有しか共時至らず延元元年湊川にて討死した



## 楠正成墓

摂州矢田部郡湊川三丁計北
坂本村の田圃の中にあり
初ハ一堆の塚のミありて
冢上に松梅の二木を印とせり
元禄四年水戸黄門光圀
御石碑をあつらへ運送し
一夜に建らる又石碑の外を
瓦葺方三間の雨露覆
あり其頃の領主
青山播磨守
侯の造立なり
街道の傍に
標石あり
楠公の墓と
鐫そ

碑石竪三尺九寸
横一尺六寸厚サ
一尺青石也中坦
竪二尺五寸横
五尺下坦竪五尺
横一丈共に白石
也亀趺前に向
へり碑面ハ
嗚呼忠臣楠子之
墓 八分字なり光圀卿の親筆
碑陰ハ明遺臣朱舜
水撰碑文
塔中石棺に圓鏡
一面を蔵む文に曰く
楠正成霊
源光圀造立



忠孝の世に著るゝハ日月の天に麗る如し日月なけれバ世上真の闇にて途方にまよふ忠孝をうしなへバ乱賊のもの絶ずして上下の分ちなし楠正成忠勇節義貞烈古今のためしなきの軍陣における双方の強弱を事の前にはやく知り勝負を息とつぐ間に決断し人の才能を見分けてそれぞれに善つかひ士卒の心を我が如く思ひいたはり實意を加へ謀計あるゆゑ合戦ごとに勝つ心を天地につけて私の志を鐡石のごとく變ぜず利欲のために心うごかず患害の為におそれず故に天子を京師へ再び還幸なし奉る然るに世のたとへの如く前門に狼の如き北條をふせぎ後門に虎にひとしき足利尊氏ありて天朝の政道非なりし悪人ために皇子を讒殺し神器を移す楠氏の功成らんとし策善なれども天子用ひたまはず凡人決断を専にし大将功を妨げしされども一身を天下に拋ち死を決して他の心なし子に遺訓するを見るに忠義を第一とし朝敵を亡し天子を安ずるを大事とし私に及ばず父子兄弟忠義を一家に集む盛なる事といふべし今に至るまで貴賤口々に称美せし其大徳又に勝る事あれども記録の明證なきを惜むべし○舜水は明の官人なり明の乱に清を滅さんと加勢を日本に頼来りて水戸に住せし忠義の學者なり

楠公之碑陰

忠孝著乎天下。日月麗乎天。天地無日月。則晦蒙否塞。人心廢忠孝。則亂賊相尋。乾坤反覆。余聞楠公諱正成者。忠勇節烈。國士無雙。蒐其行事。不可概見。大抵公之用兵。審強弱之勢於幾先。決成敗之機於呼吸。知人善任。體士推誠。是以謀無不中。而戰無不克。誓心天地。金石不渝。不為利回。不為害怵。故能興復王室。還於舊都。諺云。前門拒狼。後門進虎。廟謨不臧。元兇接踵。構殺國儲。傾移鐘簴。功垂成而震主。策雖善而弗庸。自古未有元帥妒前。庸臣專斷。而大將能立功於外者。卒之以身許國。之死靡佗。觀其臨終訓子。從容就義。託孤寄命。言不及私。自非精忠貫日。能如是整而暇乎。父子兄弟。世篤忠貞。節孝萃於一門。盛矣哉。至今王公大人以及里巷之士。交口而誦說之不衰。其必有大過人者。惜乎載筆者無所考信。不能發揚其盛美大德耳

右故河攝泉三州守贈正三位近衛中將
楠公贊　明徵士舜水朱之瑜字魯璵之
所撰。勒代碑文。以垂不朽

北畠権大納言源親房卿

[illegible]

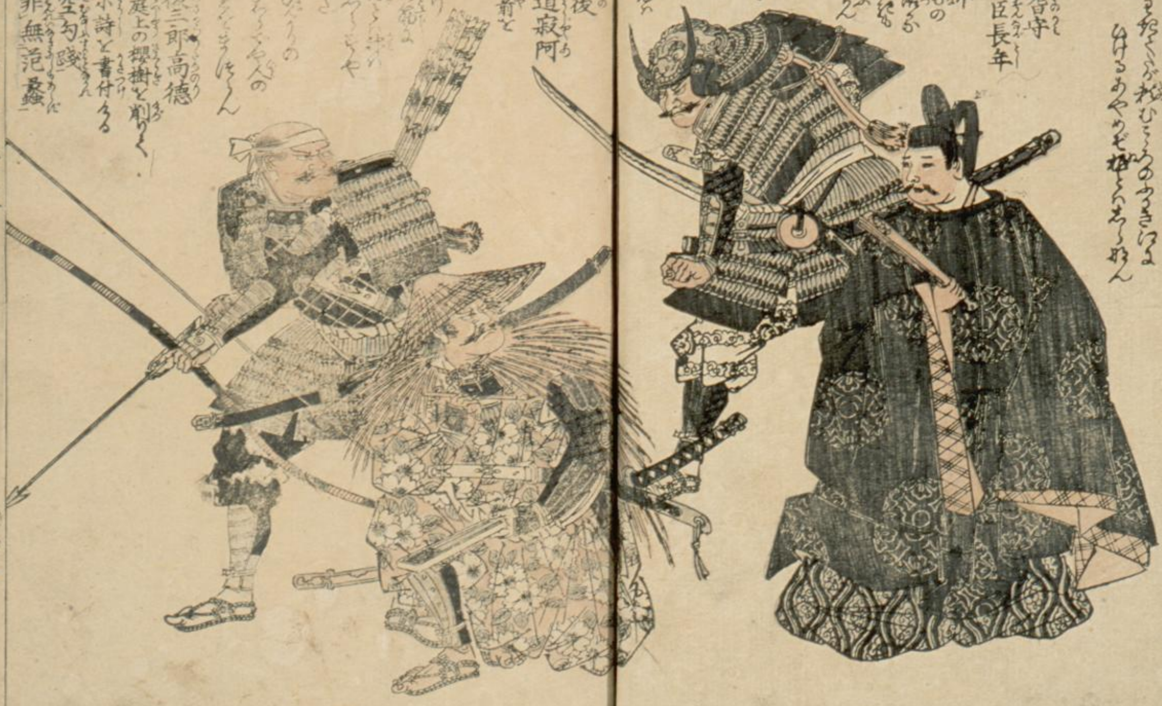
名和伯耆守

源朝臣長年

[illegible]

後醍醐天皇

長年[illegible]



菊池肥後

入道寂阿

櫛田の宮へ箭を

放つこそ

武士の[illegible]

[illegible]

兒嶋備後三郎高徳

行宮の庭上の櫻樹を削りて

二句の小詩を書付たる

天莫空勾踐

時非無范蠡

楠帯刀楠正行
吉野の奥如意輪堂の
壁に辞世の歌を記す

かへらじとかねて思へば
梓弓なき数に入る
名をぞとゞむる

おのれ壁にかきしるし
それがしかくなる人々と纔やきん
ひそう葉のうちとのそして

楠正行墳

河州讃良郡刈屋村の東にあり正平四年正月五日高師直が六万餘騎と楠主従僅三十餘人にて四條縄手に戦ひ討死せし地なり後人塚上に楠を植て傍に石をたてゝ南無権現と鐫む按るに正行の文字なれば尊氏将軍の敵なる故に姓名を忌しと見へたり楠の字へ楠木としるせしものなり

巳上口画 翠蘭堂半山図

楠朝臣正行筆跡

雄徳山神庫所蔵

今度仁王経法[illegible]奉る志趣者

先帝崩し給ひしより日毎に朝憲[illegible]

[illegible]氷上京大陽の臨[illegible] 臣等

主上の[illegible]

冷[illegible]

[illegible]人力の[illegible]

[illegible]聖経[illegible]書写し[illegible]宝前に[illegible]

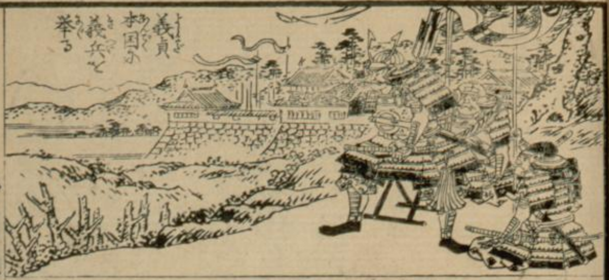
神明[illegible]照鑒[illegible]天下泰平[illegible]

宸襟[illegible]

[illegible]水清き[illegible]

興国二年辛巳五月十日

[illegible]




南朝忠臣往来

新田義貞賜綸旨事

被綸言[illegible]國

[illegible]君徳之擾乱[illegible]

海内武臣[illegible]年

[illegible]高時法師一類[illegible]

朝憲[illegible]威横[illegible]

新田義貞略傳

新田義貞ハ鎮守府將軍源義家の第三子式部大輔義國の嫡子大炊助義重より六代朝氏の子なり代〻上野國新田郡に住しついに新田を氏とし其分家には脇屋里見大舘堀口鳥山羽川山名桃井一井合岩細井江田大井田徳川岩松世良田綿打新田氏より出越後上野の両國に住す義貞ハ小太郎と称す北條高時の　後醍醐帝を隠岐國に遷すと紀楠正成兵を金

一天謀ヲ顕ス高義体ニ累年〻宸襟將起ニ叡慮の義兵厳威を源ニ抽書何ぞ浅〻運関東征討策可致天下静謐之功者綸旨如此仍執達如件

元弘三年二月十一日　左少将奉

新田小太郎殿

北畠大納言親房卿

結城左衛門尉〔宗広〕書

関城の書と云

五年六月出流御身留

囲山に挙ぐ北條氏
大軍を以て攻ると
いへども城固くし
て落ちず故に北條
高時すんく軍兵を
催そくし河内ヱ赴
かしむ義貞もその
内にあるしが竊ニ
執事舟田義昌と議
しく曰君無拠とい

窃来之後勤力事自非
持之境者備無実途連
之数指攄上自絶形勢
推察更無不賂鎮宜右
依被中領状流人増添
得数勢之到縛及延門
経大国月之間剣治久





へども素も源氏の
冑裔に列け持て時
の勢ひより北條氏
の驅使をるゝとか
り官軍に敵するは
本来へんおらんや吾
今国へ帰り義兵を
挙げ上は宸襟を除
き下は家名を興さ
んとは周竊に大塔

以下懐者無以察所存
属西洗流福富城来
為賊流編士卒流滅羅
難之臣不言而可知室
歴九箆月未見一人之
戦力聞尋之如被拘
取喩鳥雨附至境之中

宮の令旨を受け病と称し上野に帰り子の義顕弟脇屋義助等と高時を討を をはかり軍兵を催しほどなく大軍となりければ鎌倉へ討入に敵海岸により柵を樹兵艦をつらね禦ぎければた

御前城郭繞六ヶ所也
先是関城志宗祐一身
日夜馳走乞今帰陸
確也且自欲護吾
寔之情極以匠測無従
寔修国当城郡深池
共断絶白虫之文也

往来之人隙暗夜半遁
背之安之出入防禦尤
之儀也能之而已大胆
略武放郡案馬或更易
甲冑如此之数經営欲
令君影累日無快音易
子之寄宰下毒城之本

やまく坂へべき極
なし義貞馬よりおり
佩ところの金装の
太刀をとき海神へ
献じ湖の退んことを
祈りけれバ暁がた
潮たちまち退き兵船も
ともに洋中へ漂去
しけれバ義貞大に
よろこび兵と共に進て

自人情不一揆正貞者
尚幼稚枝葉者互争權
道路浮説不休私闘乱
可出来候也仍園卿
家良庄大將顕時朝臣経
追く着卿加ニ斜配流諍
此外中郡城取顕持館



直ちに府中にいり
火を放ち奮戦しける
時北條の一族ども
を誅殺し歴代 天
皇の憤怒を鎮めまゐ
らせる義貞兵を起せし
より此まで纔く十五
日にして鎌倉滅亡
す此時楠の勢まん
く強く赤松円心摂

手勢寄せ手勢定時
兵粮不足富真頼嫌
法師一人逃存忠義一
族郎従皆以者通々
前西明寺殿孝本自途
遠路不及者同致者等
天ケ所く城危如累々

魔に起り諸軍合し
て丈六波羅北条仲
時時益を討とり
天皇も京師へ還幸
阿里義貞も京へ馳
参し叡感にあづか
り擢で上野介国を
賜わり四位左兵衛
督に叙し京の宿衛
となる此に足利尊

累幕上伊佐城行朝
朝臣忠心不撓欲之間
當時随分之危城也
殊関下妻両城縁儀
令孤疑者以一所不可
相支者也抑勤功之間事
委細計畧之分大概推



氏ハ新田氏の同族
かしくみな八幡公
より出づ其門閥も
とくに相下らざ而
まろさし新田氏ハ嫡宗なり
然れども二家の威声
優劣あらずの故
あらぬ好り蓋し二家
の祖とゆふ所ハ八
幡公の第三子義国

察之後者不及言詞統
無武将斟酌之条遂文班
無其謂而猶於時宜者
可在東国奥之静謐而
誘手出清末去国府令
戦之智機宜匠測難道
日月者此境凶軍悪如

なり義国ありて上野に謫せられ新田郡に住し二子あり義重義康と云義康ハその外家田氏に依り足利郡に居る是後足利郡の半を領す義重ハ新田氏と称す故に嫡家たること明なり

向相急赴維道江海流其首何益写發向之勢不容易也士卒共国境了被示形擲死由来第三酒懇請理不事行首沖首新存逐日合退縮

志趣贈一位近三位中納言北畠顕家在国時忽上洛之後新尊氏叛逆之風聞不日上道遂成大義手被時留参不義也凌数千里之路終遂先途忘志之功也勇ニて

頼朝の総命を記るとし紀義重は附属せざれば都を思責して義康を子義兼ある則朝を仕へ離をぬ後北条氏と婚を結び其威勢まんべく盛也赤松の六波羅を攻ると北条より当氏と名跡為家を加

度々退国府入天山寂之輩人々為端緒者志之所之押平治乃位于畿内平均所之天正者非士卒之敗北天運之令然也同時戦死之族亦以不義浅然之

勢に遠りしきるに当氏名跡を欺き篇に发軍に通じ寄手に加ぞる名跡は戦死し六波羅も攻落しされども全くの功は赤松にあり当氏の功とせるは是らざれども関東の大家の足利なれば

之不幸忠孝之道也云々謂者遺恨也然乃以彼時思今日未実被存之志残遂者幾之戦被致向者俘逢以西宮軍孟並同人志之功為不功也殆見返日之件事之

天皇深く叡びおぼし
参議従三位に叙進
し尊の御一字を賜
ける高氏尊氏より叛
心ありけれバ義貞
と大塔宮とを讒し
逆謀を企て義貞を
誅伐の奏状を捧ぐ
義貞も高氏奸曲上
を欺くの状を奏聞

火急危於剝湯鑊之危
斯志一瞬之間全忠義欲
以脩命報先皇計也大
義之成否不必係於心府
運命云極矣失一命之
外無他事更不為也
惻情思此理且雖知暮



も時に高氏北条時
行を征しく鎌倉に
住し私に征夷将軍
と称し天朝を蔑如
も　天皇義貞の奏
状明白なるを以て
義貞に命じ高氏を
征伐せしむ義貞諸
軍をもよほし海内より
進む高氏ハ芽坐義

殆縮猛勅源信卿不擾
蓄情也鳥之將死其鳴
悲人之將死其言善云
我國者天祖經始之地
日神統紀之州也聖之
相承授受不惑且傳禪
讓且敗正理不經九十

なしそ之を防ぐと
いへども不くの戦
小折まけ孫介人を
り入る尊氏恐れて
備となり給らんと
去りと達義詮人と
毛をとどめ兵を引
箱根に戦ふ義貞既
小折勝ぬる家に別
に竹の下に向ひた

歴代一百七十余万載
也継治及末世不可有
遠哉日神襲綿々霊
窮哉述作上自神代
下及人皇今欲
傾国家者不久滅亡欲
国逆者必絶種類世

之所知雖敬鎮之而今
高氏為何者散飛趣く
甚先代末葉擾中京
已経七ケ年何其多
也継義平将門六年而
亡承義貞経十二年而
潰先頼卿首く晒く

る京家の兵高氏の
大軍にわれさき裏崩
を塩谷高貞に叛き
義貞の後ろを射る
義貞従兵五百ばかり
になりて引去る
中途にて高氏の兵
追来るを避ざらん
とし　天皇近江叡山に
敵ものゝ多きを以て

未到紀信見和漢之風
賊大奸着陣終取敗已
有為人之智力勝僻首
終逆今尊氏為偏非
不知政道之畏可恥
子孫之家僕所直從
虎威凌轢重代之武士

義貞と合戦に高氏
は数十万の兵を以
て大渡を破りて
京に乱入る義貞
天皇を叡山に奉じ
数度の戦ありて高氏
終に打負け摂津に
走る義貞追ひ伐ち
又大にこれを破る
高氏狼狽し武器を

彼等一族濟々之忠
擬高時不行辜孔畏氏
安治毛重氏之得先
平治以來源平兩家
為濟於家國之列
義人已來剌物武時
泰時不揣覆及百十三年

海濱に棄て舟に乗らんとして浸兵舟を争ひ溺死するもの数千人遂に西国に逃れ去る二月[illegible]關に至る義貞[illegible]旅して還る[illegible]しく義貞を右近衛中将義助を左衛門佐り明ぢかに三月義貞又

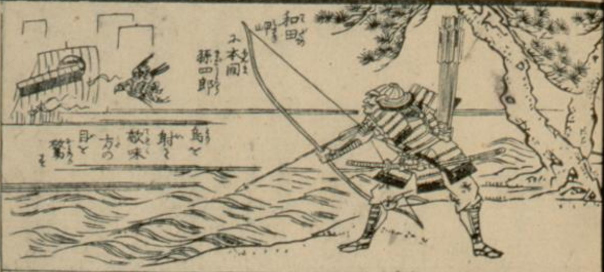
然彼義[illegible]等[illegible]
分存公儀不[illegible]悪
極[illegible]偏[illegible]術
依之[illegible]
被天下[illegible]
[illegible]
[illegible]

万騎を将て赤松則村が尊氏に黨し播州白旗の城を攻む時に城堅いまだなりと則村偽り降参を乞ふ義貞よろこび朝に乞ひ朝るのあるまに城をつくろひ降らぬ義貞大に怒り攻むれども

然本不當忠孝倫言
恐綸旨被[illegible]遺還
時自逢被催之萬義可遁
一旦之寄手為人多不當
之利白国高氏軍勢
剰我氏称来何面目
見先祖於地下無窮座

来ぐ渡をもて能えん
尊氏大軍を以て海
陸攻上ると聞く急
を京師に告げ白旗
の囲を解き兵庫より
退く　後醍醐帝正
成をして義貞を援
け尊氏を禦がしむ
義貞正成を迎へて
同く日朝廷の議いか

尊氏者雖内裏敵
源氏之第一如
之而更無面目可
謂文武之道揚地画
也於中義平逆乱時
先祖新田義重之勲功
先兼往于野武蔵国寧




後補清和将軍之未来
代々兵権一流於清
密頼朝卿未事起自勅
命後醍醐氏門に上洛不
能左右謂被為先祖之
旧の関投勇辞寧
北条之乱逢復回衆の

然るぞ正成曰く君
公を京に召し返し
駕を叡山に奉ぜん
とされども用らまじ
ば義貞曰敗軍をもつて
衛府を防がんこと
なかなか敗るこそ知る
終きども去年関東
あるく敗軍し今ゆゑ
一城も援て続くん
何を以て復命せん
や空しく敵に死を受
して戦せんとす正
成どもく陸軍の士
卒義を防ぎ自ら水軍
の義氏に当らんとす
ん皮軍無勢なれば正
成も終に死し水陸
の賊一同に義貞に
逼られば義貞も戦

奥家業新室宮
家臣同姓兄弟各有
靈屯室にかゝり勝敗
本叡道上郷敷
浪深存大戚悦統
之運付公私義趣勲
如申文不虚之是下文
子孫繼嫡流千今室
然親兄朝臣足跡
相續雖然兄弟魂
親族不及様之縁
度也此以來旅人今年
之毛論此相向之首
為一鶏刊第廿名

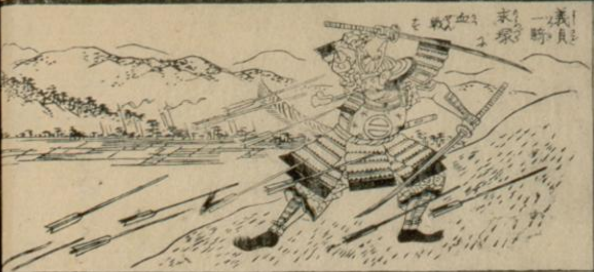
敗走の馬も鐙を統ちみく丘ふのがり救
とまつ時ふ敵射る
車騎一義貞二刀と
揮ひ十六矢を截る
小山田高家其所の
馬を義貞ふ授け留り
て討死を義貞ハ於去
六子と丹波路より
都へ引き　天皇を

[illegible]挹此芳[illegible]逆臣之枕
戴[illegible]光華貴霰
麾鐵甲[illegible]
[illegible]大則[illegible]留光
列之孝是遮而如刃[illegible]
[illegible]海流以寄於衆
樹[illegible]義[illegible]



叡山ふ供奉しゟふ
六月尊氏京師ふ入
義貞と数度の合戦
あり勝敗未さ決せ
ざるふ尊氏偽りく
詐を　天皇ふ請ひ
鳳輦を迎へ奉る義
貞竟をゑく将士を
引つき御前ま拝伏
一一族郎従今その

伺天下形容之不好
挑戦義[illegible]氏未識之運氣
者也則豆義何為臨時
帰伏者不及其[illegible]之恥
[illegible]之武[illegible]坂東者[illegible]
合[illegible]没而[illegible]
又定之時日見京都諸




乍ら綸歎曲滅亡之地
稠畳海東伴威大義
着甚官位並之威会
奥厳九時運衰王天
困の身人猿並ニ濃被贈
一位ニ不為大全忠功治今上
皇ニ逢せ之光陰如此



戦者を述べ常氏と
和しめりて好計ニ
謀り宸襟を悩させ
給ふ尊し終くハ御
前おゐて府常を死を
賜ひ而しく後ろ尊氏
が陣中ニ於て討幸した
まふべしと言上し
たれ悩るかしと治
とも乱後ハ益奉く

宜加恩並之如此く
義貞忠臣抗之身自
一天被綸旨之途不
辞大義ニ存違並様
之献由時至殺任其
為之縁息之義挙地
且又恐苑並奔来治分

しく奏聞をさへば
天皇も叡感ましまし
義貞を勅命し尊氏
子及び尊良親王を
附属し小国ニ下向
し義兵を起すべし
との勅を受け義貞
即夜ニ日吉祠ニ至
宝剣を納め祈て
曰く神者義を鑒

恩賞已数ニ及向将
之不存者不可何況
於凍餒之士卒乎
然為之皆之方
一段大義之漢耳之至
公卒事也尚画家出自
投人之公門麾下所當

賜ひて此行として
恙なく兵を發して
賊を滅せることを
得さしめん若賊は
世は子孫ニおよび
與ることあらしめ
ん遂ニ賊ニ往き
足利高経と数度の
戦あれども時運至
らずして流矢ニあ

於朝廷之礼儀称讃之
寔忠義之士者也卒之治
不知乱世之風何況武
家之郡寒飢之鄙之盛
賊勢而不得一揆従人不
受治不負之既数此身ニ
了奉之清矣継乃光朝

者乃刀を援き自ら
刎て死に時年卅八
賊ともの人尤るた
紛らに戸を撿せる
に錦嚢に書あり云
の辞に曰く賊を討
ある役朕一に卿を
然と益 後醍醐
天皇の手書なり賊
その義兵なるを知る

之一先具嘉勲之顧
命殆侍若也人和田義
又曾保護之労恐似一
郎之安否被聞召遅
之叡慮也依之諸方存
忠之輩何彼東東於く
勝ム之衛戦旗之時

高氏果して 天皇
を軍中に囚遥に獄
し奉らんとし 天
皇これを察し吉野
へ潜幸ありて義兵の
首兵部少輔義助数
十度の合戦し義兵
羽翼となりし小國
皆敵と成られ吉
野にも重き警衛し

義兵之一命不存旁
可難伴之陳者也依之忠
於一方総請之義兵
方西施一面之者遊後
順之忠勤被所之
大将軍之信思報恩
之後二三ヶ年来至一匡

後伊豫に下り数月ありて病死す義貞の夫人藤原氏ハ中納言行房の妹なり初め勾当内侍より義貞其寵を擅する
とふんでつねを恚ふ　後醍醐帝之を聞し憐みて之を妻とハ義貞戦没のち

功已成未建文曾鞍
翼之寧者高老羌氣
済湘于志交如絶
乃拔今時之流滅不
未穫新者種大之猶
安其庭別其國而
思滿之彼含也起牢世

遠略今負鉅鼎望勁士
上天財徂神積聖君
唯為之段此狂君
子倫之耳也浮之滅
聖皇天合統之両朝
興者之光華庶物而
及緣底存者宗緣又不

髪を剃り西山に隠遁せんと云ふ義貞の嫡子越後守義顕は越前金崎の城にありしが賊兵十万余にて取囲まれば食物つき馬を食ひ馬も尽きて食すべきものなく兵士飢て戦ふ事ならざれば

会稽守者退此一所留
何其恨名立大功定
配勤生於降源流
加商某之浅深以益
名也載于不宣

二月十六日

北畠親房

義顕皇子尊良に告て曰く臣は将種（大将の子）死せんばあるべからず殿下は臣と異なり遁れて自害すること勿れ皇子聞て曰く吾卿が死を見て独生んや因て義顕に自殺の方を問ふ義顕曰く臣がする処を

兵部卿親王奏達

御書

夫以勤王之欲奏功
飛之忠魂落心臓結
書籍只以一会稽之功
洞彼疆界者臣恩生与
之望云是亦之史義人

忍よ即ち刀をぬき左の腕に樹て劃して右に廻り刀を宮子に奉て休を宮子刀をとるに血滑にして振ること能はの袖を以て振り自刃して死たり次男義宗三男義興義助子義治三人倶に弱年なれ共

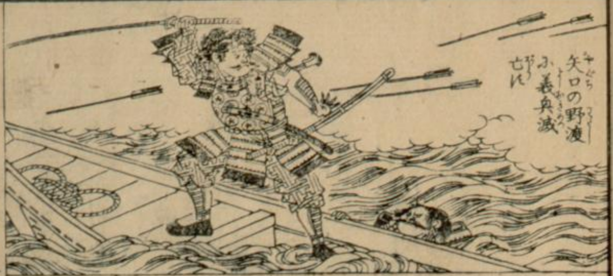
以来武家把権於廷棄改年尚矣臣苟不忘着之一縄慈懲思寵須報恩報怨敵浮伏て甲冑内恐破職罪外受恩也讒活當君為忠節為敵不顧死

我武蔵出より皆く東國に撃を正平六年尊氏兄弟不和にして直義を毒殺に攻殺を義宗義興義治勅を奉じ尊氏と武蔵野に戦ひ大に之を打敗る尊氏次男基氏を鎌倉に留めて去る義興

當斯時忠臣孝子雖有覇國不属意武浮給運臣猶世人誘不遑義兵済々陰濫中窺敵軍肆逆浮当以我為相九々為田満下活百戸以贖微毛命活在天

義治基氏とおさらし鎌倉に拠る義宗は上州白井に軍し尊氏と戦ふ上杉憲顕尊氏に降る義宗利なくして越後に去る尊氏八州の大軍を以て鎌倉を攻義興義治信濃に逃く数年を経て義興

奈何所世揺而絶日
川深山幽石嚴蒼
夜過霄出荒村里
跳道踏霜擁龍潜
亀蛇虎尾冷肉戦子
万夫遊寔策於帷幄
く中已敬於彼我く下




龍蟠方還郊圃驟
則天怒非微臣之功而
其為惺乎而今戦功未
立羅切来関于科際
一身非容不犯虚説所
統帷幄而顧朽恥哉
将済天日月不照不孝

ハ義興竹沢良衡が為の舟に滑り矢口の渡にて腹を割て死ス義宗ハ義治と上野越後に起り上杉統憲と戦ひ討死ス義治ハ出羽に走る後終る処を知らず義宗の子貞方義治の子義陸信州

者猶如天地之開闢
戴無於父子義絶乾
坤非葉何絶如之乎自
今以後勤業而執家務
藏於世經綸宣德被
優死刑削竹園之名
遂為葉門之窮君乃兄

に隠れ居く足利を伺ふ後奥州に赴き足利義満が十一州の大軍と戦ひ利なく義陸ハ名権にかくれ鎌倉の追捕と戦ひ死ス貞方ハ千葉兼胤に欺かれ七里ヶ浜にて殺さる新田氏終に亡ぶ

乎中生死而晉國亂
杖藏刑而秦世傾浸潤
之譖膚受之愬事起
于小禍治達大乾緣何
延古不墜矣今不堪愁
歎之至仰奏達誠
惶誠恐謹言

三月五日　大塔宮護良
前左大臣殿
新田足利殿参議
参議従三位兼武蔵守源
朝臣尊氏征伐
清平討義貞朝臣
一揆天下泰平状

右謹考往代列聖治四
海也不貴賤以對篤
主罪若其道遠則終
治達帝刑終不納文
肆君子不樹廟不經
也古元以倭東藩武
臣悉振逆威類世翻

楠正成略伝
楠正成ハ左大臣橘
諸兄の裔なり代々
て民間にありしが河
内に居るもの楠を
改て氏とし而正成
河内金剛山の西に
住む幼名多門丸と
云　後醍醐天皇北
條を滅さんとして
事顕れて京を出て
笠置山にこもらせ
られし時に夢に紫宸殿
の南庭に大樹あり其
下に座席を設く二
童子奏して曰く天
子今玉体を寄せ
所なしと此御座
のもとに定めあひ木
の南に従ふものハ

摘なりとく中納言藤房として正成を召て正成来を延し て之ふ謁く帝軍事を尋る命ふあふ正成感激し對曰臣策あり雖ども勝敗ハ兵家の常なり陛下荀も正成未ぞ死せずときりバ宸慮を

寃禍乱起于茲国家ふ
獲安寧民以不有く
所磨同志之附自毛遂
死而一途士運倒戈志
卜勝於夜鴻業可淺
之淼本振傳後一致之
日海猶於瞬目之中

摧敵而京畿之外彼時
義貞雖居肯窓鷄助之
貪然職為使之急深其
飛大而雖授通财ふ獲
土軍起而西為民之於
洛陽閉退遊流着履虎
尾耽魚忠廉義貞始以

労せる事なりし実
に元弘元年八月に
おゐて先づ
河内赤坂に城を築
く兵ハ百人時よ
笠置落城し　天皇
執せまゐらせ北条大
軍を以て赤坂を囲
む正成縁が積垣を
築き敵械附きまば

謀朝敵為名而実在
窮鼠噛猫闘権不
辨人斬日義貞之戦ニ
将勝屈而破ち城守堅
く安尊氏長男義詮
為三歳幼稚大将起旗
国之威動遠義卒不



縄を断ち七百余人
を殺も或ハ沸湯を
沃ぐ敵焦爛して退
く正成夜く智略を
以て敵を摧くと渋
ども兵粮つき敵ハ
日く大軍と成バ
正成底ま謂て曰く
合天下に先ざつて
大事を挙ぐ国より

招馳加義貞嚢沙背
水之陣一成而大将破敵
毛則戦治在地功臣在
我而義貞掠上前貪袖
貴忠下為之大夏残賊
国蠢害之不可不識之
今為氏為挙揺先亡之

生を斗らば然と猶
どもも　天子あり容
いまだ死べからば
即ち偽死し風反に
聚じて逃まぞ金剛
山に入り千早の城
を築く彼山を挟を
盤と帯周回一里る
さ数百仞中尺の窮
あり早と猶ども水

餘殃久蓄東征之首佞
臣在朝讒口乱真氏偏
生於義貞河黨裏並
兆猶高孫円章郡港
捷之謂乎大逆之基
可莫甚於毛寫兆於撥
乱武將不全備速乾陪

洄ぞ文針を以く赤
坂を取らへし別將
として向らしむ三
年東軍金剛山赤坂
吉野を攻む後まく
両城を陥い主賊を
含金剛山又華中り
ぬ又西南法道の兵
高時の徹に無じて
至りされい先勝八

早被下勅許誅伐彼
逆類将致海内之安静
不堪懇歎之至義貞誠
惶誠恐謹言

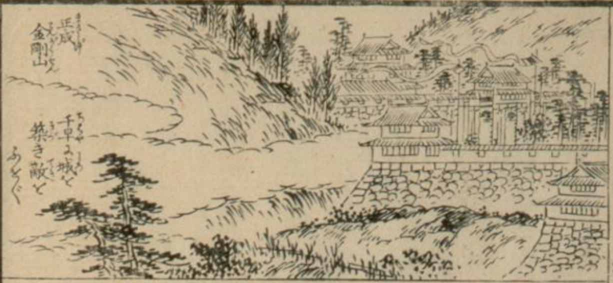
建武二年十月日

源義貞奏状

従四位上行左兵衛督兼

十万ときこへしか
然ども正成機小無
じ統ふせぎ賊属く
敗軍し死傷算なし
敵筆者十二人そし
て死傷のものと沈
せし小三至夜等を
逃るなし緒道の豪
傑正成の風をきし
為ざるものなし眺

聖文定宇宙也威前
源家末流之兒尊氏
直義不恥敵本之酒僕
並踏青雲之高度徒
新功積勤一暎太平
初山門震動略地握敵
南有正成西有圓心如之




播磨守源朝臣義貞
誠恐誠惶謹言
請早誅伐逆臣尊氏
直義等徇天下状
右謹案當今聖主経
緯天地徳光古今化蓋
三才而沢神武揚端

ゐく六波羅北條仲
時ゞ敗死の由ゞ聞へ
ゑれい寄手發乱し
引去る正成追ひ伐
ち大ふ毛を破る
天皇伯州より還幸
しあふ正成七ふ騎
と將ひく兵庫ゞ迎
へ謁ん　天皇正成
をちうく　存き今日

四夷蜂起六軍虎窮其
時高氏通東夷命盡族
上洛潜看軍勢勝
有表裏既終於不返心
於一海打勝運於為謂
之處名越尾張守高家
於戰場殞命之後始與



のことハ汝が忠戦
ゐ效ハ依と宣ひ
けゑバ正成曰全く
天子の威靈ふより
臣万死を出で薄ひ
天日をねする事を
得ふるなりと辭謝
を詔して前驅ふら
しむ　天皇正成ふ
河内攝津を賜ひ撿

義率軍丹州天津奉命
之日忽察鷲峰攸
為旗纏紛要非義旗
約京高氏殺死也為氏
猶把後代高氏敗乎過當
憶之深懷忠非彼須益
愧亡卒之遂嚴令以功

非違使左衛門尉に
なさる尊氏叛
き東国の大軍を引
て京師を犯ん天
皇叡山に幸ん正成
新田北畠等を助け
数度の戦ひあり遂
男と使ひ奇計を以
て終に尊氏を打破
り兵庫に追おて数

微尉多類精義貞忠
義剛攄滌吐く舌筋吐
浸淫く漢于懇忠不一入
新治義貞賜節鉞追
討綸旨勅記う上卿を
又月八日追尊氏付友軍
敗後六波羅同月七日追

くふられを破る尊
氏西国に逃走去る
正成いづくまでも
追ひおんと談ずる
に義貞遷延して三
ケ月に及り猶おへ
お入り赤松を囲む
尊氏西国より大軍
ろく海陸攻上る義
貞兵庫より急を告

都鄙和去八百餘里豈
一日中得傳言尊氏而義貞
京洛所敗軍破摧旗く
史載上宮滌云亂流豈
不識子卒飛一尊氏男
義論才章百餘騎擧
豈入總食を六月二日追義

ぐ　天皇正成に命
じ是を拒防がしむ
正成奏していはく
尊氏新手の大軍我
が疲兵をもて他の奇
道をもちて之を防ぎ
難し然らば天
皇まづ叡山に幸し
義貞を兵庫より召
返し尊氏を京に入

らしめ臣は河内に
くだり敵の糧道を断
べし敵は日々に散じ
我が兵は日々に集
り衆を攻る時は一
戦に必勝べし諸公
卿これを許さず
も独坊門清忠云く
敵多勢といへども
恐るに足らず速

兵海并猛士立其黨
是年月廿二日也而義詮
為三歲幼稚之大將使
合戰之必掠上京之衆
雲泥可置之於遠何
是言其罪二件時時
蓋尊後也之後尊氏來

被勅許自專東都之
法彼潔淋親王之罪佗非
同行法之雄者何不淺
天飛三災華之後遂更
來心服本枝程不墜根
之為春下行花於東國
已令蓋柳營于寒外

に淀さ戦ふなし
天皇清忠の言に従
ひ正成に赴かしむ
五月十六日弟正季
子正行等と騎を率
しく西の桜井の驛
に到り正行を河内
に帰す時に正行年
十一之を誡て曰く
今日の役天下安危

爰尊氏僭詔違皇沢
欲自立備上無法之甚
掠道者罪因莫之紛叢
然存揚嫡嫁忽之日篤
民申賜東八箇国盛給
不叙用法勅裁難被
蒙恩沢害民事利欲

遠勅撰般之逆行無惑
旅罵其罪及天運縮
雖無不継宜成敗帰一
統大化将万年偏出手
公卿親王旨謀百姓
擇種之移遊去偏流刑
況送臣乱国暴逆不

の変なる如きなりお
りふ我まさ汝と
見に汝が戦死を
と申ば金剛山の舊
址を守り身を以て
君のために死すべし
利を計り義を忘る
ゝを勿き同く帝の
賜ふ所の宝刀を以
て大きに接く正行

悪之至極六親之賜刑
専為押領婦女而已
古武丁放桐宮豈非此
謂乎然尊氏奸佞宕
意於公儀外等若鑑
於國圖中人面獣心
積悪毛可君也孰不可

共に死せんと請ふ
正成叱て去らしむ
弟正季と七百騎を
ひきひて兵庫に至
り義貞と見て勅
し終夜決戦し湊川
に陣を足利直義又
十万騎を以て来り
戦ふ正成兄弟左右
に別れて七度合ひ

忠乎至死七生義讐
幼相模次郎時行寡勢
不戦而退諫倉之時竊
遣使者奉湊兵部卿
親王之意編其將頼
國家之鶴此事深浮
未達叡聞也不知遍

まそぞに直義とお戦
らんとん為氏兵を
分て我が軍の後を
囲む正成兄弟ならさ
れ多と血戦すること
十六合従兵お死し
七十三騎におなさ
られとも囲を破り
引取んへ安うるを
正成生きを欲さん湊

畏何藏大逆無道之甚
千古未有此類其罪八
斯八逆之乾坤且不容
宮之則也若刑播於聞
者足維方絶八拾餘
騎盡趨騎將義負一
挙大軍百戦破壊百卒

川の民家に入り座
して従容として欧十
一剣を被る敵て正
季に謂て曰死て何
とかなん正季の曰
願くハ七度人間に
生まく国賊を殺さん
とハ正成欣然とし
て笑て曰これ吾心
なり終に正季と刺

不顧死白遥避洗於干
戈下濁静澄於尺寸中
面尊氏附驥尾鉅險
雲擡草戦維多大功
新建執白編言而最美
為氏湖為奇大威愛
義士在野清流義只白

逵て死にし時に正十
三歳七十三騎一人
も討れ枕を並て死
を尊氏正成の首を
河内に送り母を子
正行これを見て起
て奥に入るを母ひ
そろり伺ふに自殺
せんとれ母も刀を
奪ひて曰汝の父汝

義貞傾忠心盡正義
為朝家捨命先勾當奏
罰尊氏國家閙擾孰白
理世安民之政矣詮
乾臨照中正加新寵
最皆御天合律罰尊氏
直義以下逆黨等也

下賜宣旨忽排浮雲擁
群將耀白日之明光義貞
誠惶誠恐謹言
建武二年十月日
山門牒送南都状
延暦寺牒 興福寺衙
請早廻要計一味合

と此に働しあふれ
自殺せよとふ雖も
父の志をつぎ忠義
を尽し朝敵を滅せ
とふれ雖や汝桜井
にて父の遺訓を受
子くも忘しやと涙
を流しもまば正行
大に感悦も是より
輝児と戯るにも軍

策追四州之敵兮武運
義以下逆流示政経
王法昌栄状
懐御法偶君邦兮七百
修蔵祝宗益蒼生
法相宗軽秘儀最勝
神明益権論兮七千餘

兵駆引の体をなし
曰く足利を追くる
氏の首を取んとも
にまり河内紀伊の
義を抱く身のまゝ
正行を載き義兵を
起さんとに　天皇
吉野に潜幸にと前
正行大に悦び従ひ
和田正朝と馳て行

座主宝祚耀威光之日
新三聖之霊験矣絶也
以先生淺海之建興福
寺以慈八識天帝之始
講後宅桓武帝開比
叡山以挑円教三観之法
然尔以来南都北嶺共

宮に詣紀河内紀伊の将士と警衛し天皇正成に三位左近衛中将を贈り正行の忠志を感じ正四位下菊刀にありあひ遊まで左衛門尉河内守に任ぜ正行金剛山により楠[illegible]に出戦ふ此時後

掌護国後生之精祈
天台法相両宗碩実
顕之奥旨是以御
法守王法隆鎮ニ至
弘綱法橋元也因茲当
山前焼之時通白疏而
讒窓情朝家背終日



村上天皇即位の正平二年に高氏細川顕氏に命じ三千騎を将ひて来り攻む正行七百人を以て是を破る山名時氏又六千騎を以て加り勝に正行又是を住吉に破る時氏剣を被り顕氏と共に敗

因丹心而祈安静矣六
年以来天下大乱民間
不静就中為民遠承
起自息遠鄙之蘭枝沼
郵原之皇沢未知君臣
之旦勿背戦猫之樹
営後門戒膺縮諂

走し波急川に逃落
さまし溺死するもの
數しる正行進で京に
逼る尊氏大に懼き
二十餘萬の兵を發
し高師直を大將と
なし正行を攻む正
行正時一族とつま
吉野に至り奏して
曰く父正成命を落

殘害藩籬猜忌王業衰
皇之聖運更難尊氏一
人之武功全報逆無其
輔以義貞孫主教僉天
功爲力皆趍不和逆
將朝猶舉逆謀劉濞
之不足逆爲臣犯君忘

その時ハ僅年十一
父の遺命を請け朝
敵を滅し宸襟を安
んじまんとん僅今
年已に長じ能兵せ
来る病にして前途期
し難し一旦空しく
死バ不忠不孝と今
賊大軍を以て来る
乞僅命を致その時

恩背義用鬪以來京學
王師逆乃盡春之初極
火甚於燎原九市之城
闕成灰燼暴風扇于區
宇生吾華之黎氏塗
炭論主積惡誰不欲見
且爲逆首肉之兄弟且

臣彼の首をゆるふ
彼ん が臣が首を彼
ヌ援けん臣の生死
今日ふ決して一段
天顔を拝し奉らん
為ふ参り奉ると
天皇御麾をかゝげ
正行を返くなされ
前日の交戦大ひふ
賊を摧き朕の心を

為御下和光之神助廻擧
於七社之擁護任安全
四明之鎮府為凡之
此時豈敢手數三千一
探忠臣命投義兵勤仕
同心代員其威伏夷賊王
道未盡神威滑通之飢

逆黨夫旗頭西出儀
例我方敗北嚇指紅焔
消雷相似圍石之壓卵
普晉之行八百地軍殘
猶無之兵唐之威風且
也及郷吐萬之陣蓋乃
行猖元逆使微塵矣

尉り今賊大ふ至るふ
実ふ安危の時昧ふ
と以て手足とふん
汝進退區ふ従ひ
合戦し能く身を
愛さよ正行感涙し
て去り　後醍醐帝
の陵へ参り拝し
一族郎黨百四十三
人の姓名を廟壁ふ

之威儀從風靡之逞者
天擺擾上下因凡慶
雲之廻海藩親遠
逆徒聚遂泥之努冷色
営佗羨佗之精淑之豈
非叡圍王山王之加護哉
今賊黨專竊觀帝城



留め出陣し明年二
月三千騎を以て所
々が八坂騎ニ駈向
敵の陣くと打破り
所々の本陣とうち
我兵強死して我ふ
一以て百ふ當ざるふ
あし賊軍と敵くふ
打破る所々流ニ庵
うろし小を底偽り

官軍增衍經延途外獲
先蒙之犯儀重及南北
旅傘山之山下與廢兵
在此時仏法王法傳表
豈非今日天下之數哉
七社之靈驗偏無安危
於朝廷法桐之謹據旨訴

師直と称し死んで正
行も首をかへて大に
悦び三度空中へ投
上ては手に受る事三度既
にして師直に非ざるを
知り正行頭を地
になげ捨て罵て曰
汝も亦無双の国賊
なり然ども其勇は
称すべしと袖にて

之冥感盍加且又貞国
家之奇特哉是忠
貞者座主須運輔君之
計略矣海山之懇祈
通高同而感合体一朝之
治乱何混群議而無力
仍勤事由牒送如件故

首を裹み跪上に置
き又師直を逐ふ然
ども我兵暁より晩
まで三十余度の戦
にて活力尽き進退
自在ならざれど
も正行は師直を目
がけ前に先き立ち
進む故多勢なれど
矢を放つこと雨の如

勿猶豫故牒
延元元年六月日
延暦寺三千衆徒

同返牒

興福寺衆徒牒 延暦寺衙
来牒一紙
牒文観行大乱之応衛程

て先に名を記さる
の百四十三人一人
も逃るゝ者なし正
行の弟正儀是より代
り左衛門尉に任じ
敵と訴ゝ小戦ひ操
計勇戦後くなりと
然も南朝は気小衆
微し四方の義軍滅
ぶ正儀も病死に

牙旌任忠節纒挿
野心計揚氏可為鉾在
藩渓可作逆勲略分縣
操麿吏民帝都悉燒
紛佛閣多魔滅狹赤眉
之入威陽朝黄巾寇河北
蹤吹之甚自古來寄天

誅之新鑿冥迹何須道
固銘泉春之神棚轉棘
斡一擁関中匠馬倚編
纔猶西国英今纔立級
軍擁被紛殺不発雷霆
之威空待斧钺之罪六
軍殺廻辭究蓋振气則

此時に当り官軍の保つ所ハ金剛山一城のミ元中九年義満畠山義深をして数万騎をて金剛山を攻む正成城を棄しより凡六十年にて賊の滅す所となる南朝終に北帝と和し楠氏も亦亡ぶ

孟津再駕之役猶有所
亡退城濮之会遂縮伍
彼敗也支遠天者皆大将
其取者亡助寡積暴之
擧豈又能久守今廻
皇輿於花洛之朔漠軍
幕於猶渓之魚三尹雖



北畠氏略傳

北畠顕家ハ姓源具平親王より出世く縉紳家にして元弘の時顕家従三位参議を以て陸奥守となり父親房と義良親王を奉じて陸奥を治し鎮守将軍に任ぜ新田義貞足利尊氏

倡定合縦行之当七於
霊神積白迯雍護之勝
先被代宗之屯長安也
勤師於香積寺之中
匈殘之在金微也源兵
於天台山之北率付先遂
寧継撲守宸垂窮究

し正行身に矢を受る簑の毛の如し正行曰く事爰に至る敵に討るべからずとて正時とさしちがへて北に向ひ静る年二十二残兵皆自殺し和田秀実は正朝の弟也賊軍に混じて師直を撃んとし我

也学園頓而河淮之流
等芳無垢之上器也矣
可義於印度之流毛以
隋高祖之宗重文教
収清唐文宗奪神藻
瑶花風芳遊戯一夏数
揚之東曉遺傳于叡山



歩卒湯浅某これを知り後より窃に窺目を瞋て湯浅を見る湯浅恐く後病を得て死す正朝は逃て今日の戦状を奏せんと欲す一賊之を呼で曰く獨亡るや正朝笑て返し数騎と闘て死を爰に於

三國相承之真宗雖留
手書寺以澤及子孫
軌範百王寛是弘佛法
之宏綱叢機之基之洪緒
夫迦彼萬式並義亦遠
震旦之五恵東夷之澤輝
雖非鶴寿之才慶和

を鎌倉に伐のよし紀
顕家陸奥より至る
義貞既に破れ尊氏
京に入る顕家是を
追て近江に至り六
角氏の観音寺の城
を攻破り叡山に登
り義貞正成と力を
合せ尊氏を破り西
国に走らしむ顕家奥

洛陽青華之小草抽丹
棘於中庭芳荊之
長久只期妖孽之滅
亡精誠無貳真勲莫亢
乎號中寺之舉要
國中之勇士頻首加賞
之志屢追逐凶賊之業





州に帰る後結城宗
広と義良親王を奉
じ尊氏の子義詮と
利根川に破り退て
鎌倉を取り義詮を
走らせ顕家ハ京師
に上る敵後に在と
きく兵を回し濃州
青野原に戦ひ敵を
破り高師泰と伊勢

從南山境迴風馬之蹄
不及山川地殊雲霧之際
縱橫奧羽又鋭鋒擒誅
鋭迴松濤之下人心未和睦
在蕭墻之中雖對越境
膚淺有究城之軍功為
爲進退失度但綸綸屢

小破り南部ハ玉り敵と戦ふ利無し摂州安部野ふて高師直と戦ひ敗死ス弟顕信父の職任を継ぎ父親房及宗廣と義良親王を奉じて海路を奥州ニ赴く遠州海ふて逆風ニあひ船散乱し親房

降牒並縦踏上速筆
将所手紀此書令牒
牒到准状故牒
延元元年六月日
興福寺衆徒
新田義貞山門牒状
正四位上行左近衛中将臣



ハ常陸ニ至り宗廣ハ伊勢に至り顕信と親王ハ篠嶋ふ至る宗廣ハ病死ス四年三月顕信親王を奉じ吉野ニ赴く此時皇太子及び成良親王ハ尊氏の為ニ毒殺さるゝ天子崩ふ際し義良親王

播磨守源朝臣義貞牒
延暦寺衙
請早得山門贔屓
一旦誅罰逆臣尊氏
直義以下党類輙
進王法光華状
右竊觀素皆開風

を以て後嗣とし
後村上天皇是なり
興国元年顕信白川
に居る父親房小田
に居る賊将高師冬
大軍を以て攻む結
城親朝ハ宗広の子
し宗広ま云し忠
を南朝に尽さしむ
致るに親朝父の命

桓武皇帝下詔営基
叡山以聖化鎮昌顕
密教宗於信戴伝教大
師上表九誌王城者以法
威為護國家太平於是
驅之耳也於則同山門
義徽将之凡人朝廷傾廃

出之不孔不久聖徳之子
之庭洗為鵬雲元弘之
始一天普命冒海波風
之後貴源家饒揚富民
重義安忠貪大禄不有
也守官自擔都護皇
沢之歎波盪之天下忽

に背き尊氏に心を通ずる故に親房を救はんと親房関の城に在る敵攻め囲むを急ぐ親房使を奥州に走らし顕信に来り援けしむ親朝又是を妨げ通さず四年親房手簡を以て親朝を諭す親朝従

棄君臣之義[illegible][illegible]恨
之心遂害流于萬民猶
滿于八極公儀不復上[illegible]
紛天[illegible]々日燈[illegible][illegible]優[illegible]
重月華花[illegible]掃[illegible]明
雲此時者[illegible]勿補[illegible]備
[illegible]漂逃暴[illegible]縦者死亦

ざれば城つゐに落ち親房吉野にかへる是より東北の官軍衰散せり

名和氏略傳

名和氏はもと村上氏世々伯耆名和に住せ長久の役名和行秋なるもの孫の行高と官軍に従ひ

[illegible]乃者寡求黨者利
門志多同族友軍戦破
而聖主天下遺義[illegible]因
纏城合謀而君主亡戦
據之丹自今以降逆流
弥德意[illegible]刑濫行封由
府殊賊亟不悪而權自

軍中ヶ邑を失ふ
行高四子あり長高
長重長生氏高と倶
に勇名あり　帝源
攻を出て名和の湊
小花きあふり紀長
高の名を守し　たし
千種忠顕を使とし
て長高の家小至る
時小家中まさる変化

縦天維之絶日月無所
縦地軸沈摧山川不得
載側耳奇目焉不患
約時呑炭含奴從施計
垂教之変歎雖響楽事
南山之星拱北極之毛
旌忠徹懐諸懐記自治

忠顕座に入て詔を
伝ふ長高いまだ答
ず長重進んで曰く
人のおんぜる処は
名のミ今帝くも
帝の自耗を受るや
成否とりくらる大
名を天下に揚るに
足る長高乃ち意を
決して　帝を船上

獨々中継海郡県之誼
然則驅合井兩路允大
鶴動城之戦未半攻勝
於一挙逸敵於罔方晴
菅花籠鬪黄地破呉
三万之旅周郎挑赤壁
虜魏十万之軍把来

山ニ奉ぜんことを計 長重ニ人をして 帝を迎しむ 帝欣 給ひ長重萬を甲 背ニ被ひ 帝を負 ひまつりて山ニ登り 木葉をしき食を進 む長ニ餘粟を山ニ うけしむ...なりちに く宅を中紀百人

何足比如今挙國悉染
朝敵天恩以官爲凡才
經歴不遑卜居秦振翼
將發京御前山偃若不
捐叡旨犯大敵亦復叉手
中心矣終前南山之霧後
猶且古亘今卑耳乾



十騎を以て出發し 布を以て近國諸將 の紋を画き旗とな し大軍の体をなし 湯彼の佐々木清高 三千を以て來り攻 む山上の旗を見て 恐れて我 兵射て敵の一將を 殺す敵八百人來り

坤兼和修大威德法
次君乃生玉展兼平安
四天王之像將門之傷毀
然毛以類往運并七社之
寘靈復舊願於一山之
冤弾孰思君之凡惡在
彼旬義丕我孰旬天下

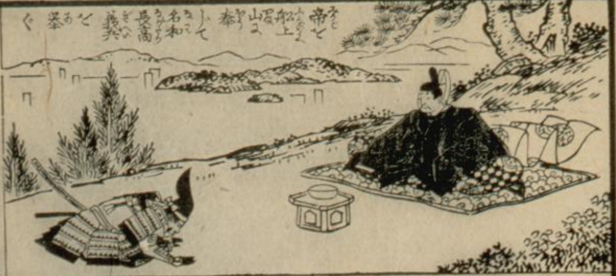
降る時ふ大雷雨あり長高の才ふ機ふ家ども急ふおち敵を若へ斬りこむこと千余人清高単舸のがれ去る天皇長高を伯耆守左衛門尉になされ名を長年ふ賜る諸才一族ことごと官位を下さ

之治乱山門之安危乎
同一諸之群侶以遂合虎
竹連離三軍之舞他
向為搖龍旗模旗速如約
勤之以状

延元二年七月日

同返牒




帝を船上山ニ奉じて名和長高義兵を挙ぐ

延暦寺牒新田左中将家衙
来牒一紙被載朝敵
追罰事
右積日来之擾乱百國
家之太平者武将不和
共乱行百王之宝祚

る而して山陰山陽
の豪傑来り属する
もの数十家児島高
徳も備前より来る
長年の子義高初め
る時の徴に応じて
金剛山にあり又長
年友軍に応ぜるを
きく軍を抜て帰る
京師平ぎ　天皇還

猜天地之妖魔吾出山
所不讓他途殊同道
其際措一線手支之
氏臣義亦暴悪古来
吹毫毛匪啻佛法王
法之怨致無又為害国
害民之逆賊重斬首去



幸あり長年御剣と
捧げ右に侍も百度
甲冑を帔し従ふ
天皇長年に因幡伯
耆を賜ひ楠正成と
並ぶ所に列し[illegible]
と号し後足利高
氏九州より京に寇
する時長年数彼の
大戦とたし兵二百

岩捨已看降甚深若
今更以何紀綱途
信益振威義士頃国
何乎取歎着文差益
誠之風邈為匂残不權
項羽抜山之力却為沛
公見擒毛則不以兵無

人と倶ニ戦死す
児嶋氏略傳
児嶋氏もと三宅氏
父を範長と云備後
守たり世々備前児
嶋ニ住せり子の高徳
備後三郎と称す
後醍醐帝の笠置ニ
おゐて範長高徳と共
を援んと謀り楠

義挟漢書仁臣已遂安
危不拘世若天命矣毛
以山門同重武備忠烈
引家運外和聖之
蒙宗行皇獻上下處
岩倉天難之淪挍舊
尽独丹心一山之忱悦



氏敗るゝと聞乃止
帝の隠岐ニ流さるゝ
ある時高徳備播の
境舟坂山ニ兵を伏
し駕を奪ひ兵を擧
んとし時ニ駕美作
の杉坂ニ向ふと聞
高徳馳向へば車
流ニ遷されて後ニ
於て兵数を以高徳

度事如之七社之靈涯
此時露形情把津著
吉野南山如桑則挙世
記白不互治義之乱高
奥宮事没外都之麿
書寺為句則合宿
白不得勝元曆之神源

猶悵恨し去て絶ハず。服をかへ駕を追て紆らず数日一度天顔を拝し志を述んとすれども兵士駕を厳固して事成ず。因て桜の木を削りて二句の詩をしるして曰く　天莫空勾践。時非無范蠡矣

義仲忽擧中夏之月旗
人情起已振被服似
敵地淺山嘗迄今如
出陣之洪職河首級時
兼之到將旬逆撥而
勝蓋如件謹信以状
延元二年七月日



士為其詩を読こと能ハず。天皇独ゑあひて其意を悟り龍顔を慶し天皇隠岐の舟上に幸ありしが高徳馳せ参り長年に力を合せ天皇高徳に命じ千種忠顕を助け六波羅を伐しむ忠顕等

菊池右京權大夫
武敏殿代家業事
右今度勅使如被申將
軍宮為南家之忠功者
不可過元弘忠士歟因
羅難被閣群叢懇意之
謹檢南家先代之忠内

の堂に陣を高徳別
に七條桜に陣し敵
の夜討に備ふ時よ
忠顕猶功を専らに
せんとてたくひ
敗走陣を棄去る高
徳峯の堂に篝火の
消るを怪み行て見
れば将の旗を地に
ふして一人もなし高

中関白道隆公代々後胤
太祖大夫将監則隆公後
三条院御宇延久年中
始自洛下向菊池郡住
至武朝十七代不白也
清奉仕朝家忠功無双
永元暦之頃有叢祖肥

後守隆直不白東夷
逆謀奉守剣璽受 安
徳天皇之勅命数年勵
忠勤婦之隆長三男秀
直以下数輩没命年
後鳥羽院御代兼久合
戦之時先祖能隆為大

徳旗を収め高山寺
をまもる此時足利高
氏味方に属し京都
を攻む将士本でも
小帰に高徳独り
を好まに荻野朝忠
と別に若狭路より
攻入る新田義貞の
赤松を攻るとき郎
義助為に舟坂を攻

番役継進遂叔父安人
渋流遣進戦平號史當
家本所数箇所為平義
時被没倒平文永弘安
再度蒙古襲来之時、
高祖武房励勇敢戦
擒旋棟名捨矢輌既抽



む敵堅くまもる高徳
俄を以て右曰三石
山の南に間道あり
舟坂の後に出づ若
兵を然山に挙ぐ敵
必ず勢を分て之を
攻ん君軍をわち間
道を旅へ搦手撃べ
舟坂落べし舟坂落
ば西国まぐ防ぐ者

日本之為日本之大功
由顕天下之歌謡乎
後醍醐天皇御時元弘
三年忠営祖父武時入
道寂河森奉勅語同三
月十三日打入出滝季
英時之陣父子一族以

ゑしと義助を言ふ
従ひ舟坂を攻落せ
高徳父範長と共よ
僅二百人を以て三
千人を打破る足利
尊氏の九州より上
る高徳熊山の戦ひ
に討手を負ひ高を
る事能はず範長も
を僧寺に托し八十

卜奄新将之討死年
然之元弘一統之後義貞
正成長年今出仕之日
如正成言之元弘忠
烈者皆功遂治惟多
何存則命之也独綱勅
誼運一命者武時入



余人と東に赴く赤
松の兵三百騎をも
尽く呼り速に従
系せよと云範長笑
ひ為氏我を招く我
を書を破り火に投
に何ぞ汝為に従ん
やと奮戦して囲を
出残卒六人と倶に
自刃して死も高徳

也忠厚尤為第一死之
此家遂厳騒之由世以
無主源之也建武二年
為氏藻叛以来之武重
今泰涂並献忠謹之旨
寢親以下御威特絶比
数者也旅程西在囲之

剣ハ義貞義助に
従ひ数く忠戦を後
髪を剃り吉野に在
り密詔を奉じて東
北の義軍を促がし
新田氏の族と倶に
菊氏を武蔵に破る
後その終る所を知
らず

菊池氏畧傳

一族等致忠謀代々
大功菊池氏下向之時於
長良濱合戦励武
翌年延元年中武重
下向後之致度々合戦
菊池郡々岩蓋在所
武士令相續彼武名馳



菊池ハもと藤原氏
其先政則なりの
元の寇を防ぎ功あ
て子の則隆にいた
りて肥後菊池郡を
賜ふ則隆の後十四
世を武時といふ
後醍醐天皇のと紀
武時廿貳貞經大友
貞宗と謀り叛軍に

廻肥後筑後致度々合戦
令攻擒遠近之叛軍甚
興國以後其武威盛
故大王入御宮細於八
代城自令對治一通令得
道歟父子之後中渉沽
大小箸策令服大友

癈じ鎮西の探題北
條英時を征伐せん
とし車党る武時
先駆せんとしみ貳
大友心を変じ返ぐ
武時大に怒て曰く
彼等あくとも合ひ
とり戦ふにあらん
ざらんやと百餘騎
を以て駆に櫛田の

廿貳日於博多所
之陣鎮西一族之大功
也武政者令相違彼
忠功被度々合戦運稽
く討果時分会毎て
間武朝自十二歳之時
令参勤筑州大王御陣

守父祖於鎮之旨相續
鎮西御大事以来之父
中く在ヲ候寄来候
時數月励防戦之武略
於水島陣成ヲ候追落
之功鎮西被安穏静謐
誠是剌武朝等所掌

祠前をすぐるに紀
馬儀ふ進まず武時怒
て曰く何ぞ我義
兵をさまたぐると問く
其鏑を射る馬乃ち
進む遂に探題を
太宰府に攻め外城
を打破り内城にて
攻詰る探題自殺せ
んとする處へ少弐

官令在津肥前國府違
諸將計策其處今川仲
秋來肆松浦黨之西
遂打出博多之間探題
肥後國守護代武國致
大綱合戰之處仲秋弁
又大内義弘豐前豐

大友六千騎を以て
武時を伐つ武時長
子武重を國へ帰し
其身次子四人と
討死す武重菊池を
相續し新田義貞に
從ひ足利尊氏兄弟
と箱根に伐つ既に
して義貞の軍敗も
武重四百騎を以て

後攻之出陣於其後出
之間於陸打津泊合戰
武光令武義以白
關東武安令討死年號
而後于筑後一瀬大友女
貳大内兄弟數多騎寄
肥後國之首於隈府家

義貞と戦ふて西ふ走る尊氏九州ヘ敗走の時少貳頼尚尊氏を迎へんとして武重の弟武敏頼尚を水木の渡ふ討く大ふ之を打破り少貳貞経を内山ヱ攻て之を斬り尊氏と多々良濱ふ戦ひ

天授四年九月武朝十
六歳之時任運於天道
受命於王義依為世将
終入西鎮陣抽戦伐之
勇力一族以下兵卒数
十人令討死自身被疵
攻戦京并将軍宮召

打勝んとせる処ふ味方ふ叛くものあつて武敏遂ふ敗し菊池城ふ帰る後ふ城滅ひ武敏山中ヱ逃きかくるなほ一族足利ふ従ひ武重ハ新田義助ふ従ひ備後鞆山を攻落し尊氏九州より大軍

出陣自被馳向乃徴及
御合戦之自数ヶ度軍
忠之依御感御旗下也
然令退散弘和二年
之比武朝當家奉
任将軍宮一同一族以
下被持人等受被聞處

とりて上洛をよ企
義助の敗とまり兵
庫へ退く楠正成湊
川に討死するよ紀
武重弟武吉をして
正成の陣に至らし
むる戦死のありさ
まを見て去るに忠
びる武吉もまさ君
戦して自殺を遂ち

備楯籠多々良守山之要
害擬勝武朝臣際拝迎
時日自馳向名合近落
年毛則沒而私討兼倫
不存公平之旦彼之勅
使被見知之也加之元弘
以後者以當家武略彼

尊氏降りて　天
皇に降り　天皇足
利の陣へ行幸の時
武重従ひ　天皇と
共に其陣に囚ちるか
武重逃きて菊池に
帰りて城に拠る
天皇皇子懐良親王
を征西将軍となし
菊池に赴かしむ武

九州每度之合戦致之
今相支了俊多勝陣
年號中自元弘三年至
今應弘和四年之六十
二年之間星霜也嗚呼
平十三年以後廿七年
志願無入道結党遠

重病死して弟武光
後を継け菊池武大
友と戦ふ一色直氏
を筑前に伐ち大に
之を敗る少弐大友
皆降る時に尊氏死
し弟義詮兵をやり
少弐大友を助け武
光を討つ武光時に
畠山国久を日向に

武光以来武功令居
往當家屬國之上於功
勲之次第宜存知之
於則然忠之淺深可有
御成敗者何被閣當家
代々三百餘歳忠義被
賞翫年奉公河意し



討つ大友ら清に城
を築き帰途をさへ
ぎる武光事ともせ
ず国久を破りもら
し軍を引く大友終
にさへぎるのあさ
ちに少弐頼尚六万
の兵を以て来り攻
む武光八千人を以
て将軍宮懐良親王

不堅子孫継理非有之
御沙汰者将軍宮御事
被爰正平之勅裁為故
大王御代官年来紛積
營功御理運無紛上
忘勅裁豈可直餘字
御言之如件

に供奉し筑後川に對陣し川を渡り頼尚を破り其夜武光の子武政兵を潜め頼尚を打ち其二子を斬り大に戦ふ武光機に乗じ敵の大軍を殘りなく撃ち破り大勝を得る西方の友軍大に氣を

弘和四年七月日　藤原武朝

右書藏於肥後菊池郡正觀寺

楠公之書翰

急投飛翰述思懐足利尊氏直義兄弟



得たり其後武光親王に供奉し太宰府を出づ少貳大友松浦と鋒を撃んとす武光先づ松浦を破る少貳等戦ふこと纔かに逃れ去る後武光鎮西を打從へ九州ことごとく旗下に属し足利義詮も一

西國凶徒聚軍卒雖勇三十萬騎自海陸二道進而東上京都湊川兵族率寄天下大衆不延時日之馳向于兵庫而防戰勅宣奉之急進

旗武経を探題とな
し九州に下向も武
光撃て光を是らし
廿武頼資を斬る已
にして武光病死し
子武政後を継け肥
後守となる将軍宮
を擁護も明の太祖
使をして来らしむ
その書辞の礼なきを

正成倩佐軍亜討ㇾ皮
軍徽率白何豈当大
敵寄飯屢済諫奏
君当自世御許宥室
塞源寢今自殺京師
乱戦場平鳴呼鉄血雑
由失前况義紀綱

忠死欲致戦死條無
地車亦又元弘中同
天子御勅許愛深
明至尊子孫武運宜安
垂貴流派次至俳さ
備一人到兵庫白可彼
若賊妻曲詞言記了濱

以て卿け納ば後足利氏今川貞世を探題として下向を武政子武朝と之を伐ち者ゝ勝利あり其後将軍宮及び武政武朝ホ々ゝ病死を数世の後義宗の時ふいたりて菊池氏亡ぶ

終

読者謹言

兵衛正成判

奥河内観心寺

南朝忠臣往来　終